

咲かせる花

真っ赤な桜に囲まれた遊郭は

今夜も眠らず色をうる。

お齒黒どぶに囲まれた吉原で

今宵もまた花を咲かせる。

桜吹雪が綺麗な季節になった。ここ吉原に咲いてる桜は真っ赤な色の八重咲きの桜であった。あたり一面に桜の木が生えており、風が吹くと真っ赤な桜が舞う。花見をするには最高の場所であろう。母の形見のハサミを取り出し、細い枝を切る。簡単に折れた枝は真っ赤な花を咲かせている。ふと、気がつくとも風が吹いて花びらが舞い、散ってしまう。

お齒黒どぶに囲まれた吉原で今宵もまた花を咲かせる。

毎晩毎晩、男に抱かれる日々を過ごす。好きでもない男に抱かれ続けて、明日も明後日も、そして一年後も私の世界も見る景色も変わらないだろう。

私の世界は、常に男に抱かれるだけの世界である。

男だったらどれだけ幸せだったのだろう。女は苦しすぎる。抱かれるだけ抱かれてあとは終わりのこの人生。どれだけ地獄よりもこの世界が一番つらいに決まっている。

＊

私の母は、遊女だった。そんな中でも私のことを母は産んでくれた。もちろん旦那は誰かわからない。店の店主に、自分の子供も吉原で働かせる、男の子だったらこの店の下働きで、女の子なら遊女にする、そういう約束の元、無理やり頼み込み私を産んだ。遊女にとって妊娠とは死を意味するものである。そもそもこの時代、妊娠してもまともな薬もなく医者もいなくて、なかなかの死亡率である。それに加えて一番大切なのが、妊娠期間にお腹が膨らんできってしまうと、ほぼほぼ客が取れない。

さらには子供も将来吉原の世界の人間になるというなんとも残酷なことである。

それなのに、様々なリスクのある中、母は私を産むことを選び、そして死んだ。

なぜ産んだのだろう。私には一生理解ができなかった。産んだところで私は地獄のように辛い生活が待っているのに。

それに頼りにしなかった母は私を産んですぐに死んだということもあり生まれた時から心には大きな穴が空いていた。

母は、「桜小見世」で働いていた。この店は他の店よりも小さいこともあって遊女一人一人にそこまでの価値はつけられていなかったからこそ私を産むことが出来たのかもしれない。

私が産まれてからは桜屋で大切に育てられ私も遊女になった流れだ。

\*

お齒黒どぶに囲まれた遊郭を、遊女たちは出ることができない。

私たちは一生籠の中の小鳥。だったら逃げればいい、吉原なんかでて行けばいいと思う人もいるだろう。とは言っても逃げたとしても逃げる場所もなければ一人で生きて行く勇氣もない。逆に遊郭ならご飯もあるし、寝る場所もある。

確実にここにいた方がいいに決まっている。

それに遊女が逃げれば遊郭中大騒ぎ。そこで働く男たちが一齐に騒ぎ、あたりを探し出す。力のない遊女たちはどうせすぐに見つかる。見つかってしまえば拷問されたり、ひどい時には見世物にされて殺されてしまう。そんなリスクを背負うのならば私は一生小鳥でいい。

\*

ちよいと、旦那、わっちと遊んでおくんまんし

今日も誘い文句を使い男を誘う。

桜屋は小さい店なので、そこで働く遊女たち全員で男を誘う。

煙管をふかして生足を見せ上目遣いで女を見せると大体は抱いてくれる。

桜屋は他の店に比べて小さいというだけの理由で私たちの価値は低く大した金じゃなくても抱ける仕組みになっている。値段が安いからこそ大金持ちの旦那は他の店に行ってしまうが少しなら嗜む程度の金を持つ旦那ばかりがここに来る。どんな客が来てもどうせ私たちのことなんて知ろうとしないで体目的の野郎ばかりが集まるこの店で、私にも馴染みの客がいた。

一番の馴染みは私の母の客だった。どうやら母が遊女時代の時は遊郭に遊びに来るたびに、母を抱いていたらしい。真の愛があったのか、ただ体が目的だっ

たのかはわからないが、私のことを実の娘のように可愛がってくれて、母の話をたくさんしてくれる彼はもしかしたら本当に母に恋していたかのような男性だった。だけでも彼ばかりを気にして相手をしているわけではない。他にもごまんと男はいる。その人たち全員との関係を大切にしなければならぬ。遊郭に遊びに来て、私を買ってくれた相手には素晴らしいほどの時間を与える。手練手管を使って相手を落としにいく。気があると見せかけ、また買ってもらえるように、そうする毎日の繰り返し。

今宵もまた男に抱かれ、切ない声を上げて喘ぐ。

気持ちのこもらない喘ぎ声を必死に演出し

気持ちのない好きをひたすらに嘆く。

そうして私の1日は終わる。

いつもと変わらない景色。

お齒黒どぶに囲まれた吉原で今宵もまた花を咲かせる。

\*

今日もまた変わらずに色を売る、が、気持ちがどうも乗らない。純粋に体が追いつかないのだ。

体がやけに暑いし、肌荒れもすごい。頭痛も酷いし吐き気もする。もしかしたら病気なのだろうか？ 病気といえば遊女の中たちで最も恐れられているのが「性病」だ。

避妊具がない上にそのまま行為をするため性病は一般的な病気として知れ渡っている。遊郭の中で最も恐ろしい病気とされている。

客を誘っている間も体調が大変悪くなかなか仕事に精を出せない。このことが店に一目散に広がってしまうのが怖くてなかなか言い出せない。もしも本当に性病にかかったら死ぬまで隔離されてしまうか、鉄砲女郎となって店から追い出される。

鉄砲女郎は、お店にいる遊女たちではなくて病気持ちや年季が開けた遊女たちが仕方なくたどり着く場所である。

やっすい金で抱くことができるが病気、年が上、怪我をしているなど店にいられなくなった子たちが集まるところに私が行くことになるのは何としても避けたい事案だった。母も死んでも死に切れないだろう。

それでもあまりにひどい体調のせいか店の子たちにバレてしまい、ひとまずは隔離することになった。

しばらくたち、吐き気や頭痛は治らなかったが体調の良い時や熱のない時もあったため、店の中でただの風邪だと判断された。

体調のいい時は店に戻りまたひたすら客を取り色を売る毎日が始まる。

それをもう何十回も、繰り返してからだ。

徐々に体は重くなりだるくなる日が明らかに増えた。次第に私のお腹も膨らんでいく。体調が悪くなりお腹が膨らむ病氣といったらひとつしかない。

妊娠であったのだ。

風邪でも性病でもなく、正体は妊娠だった。妊娠と分かれば確実に、墮ろせと言われるに違いない。母が私を産んだ時だって、私を遊女にするという条件のもとで私を産んだ。簡単に言ってしまうえば母が私を店に“売った”ということになる。私にとって母のその決断は永遠にわからない答えであろう。

吉原は生き地獄と言われている。好きでもない男に抱かれる人生、誰も楽しいなんて思わないに決まっている。ましては、大見屋だったらまだしも小見世の桜屋である。花魁になれるわけでもなければ誰もが憧れる花魁道中なんてできるわけがない。もちろん遊郭からは一生出られないし、永遠にここに閉じこめることになる。

もしも、女の子であった場合自分の子供を遊女にするなんて考えられない。男の子だったらまだいい。だけでも男の子であろうと結局はこの店の働き手になるだろう。どのみち遊郭からは逃げられない。だからと行ってせっかく預かった命を無駄にするわけにも行かない。ひとりぼっちの私に唯一できた家族がお腹の中の子供である。それを簡単に手放せるわけがない。今ようやくわかる。母も同じ気持ちだったのだろう。心に空いた穴が初めて埋まる感覚が私を襲う。だけれども私は自分の子供を桜屋に売る勇気なんてなおさらない。女の子なら、自分の子供が色を売って男に抱かれることを、想像するだけで涙ができて耐えられない。

それでも私は、次第に大きくなるお腹を私はどうしても諦めることができなかった。もちろん旦那は誰かもわからない。子供は愛する人と作る愛の結晶だなんていうけれど夢物語の可愛いお話なんて私は縁のない話である。よくよく考えて誰の子かもわからないなんて、悲しすぎる。それに、仮に産んでも子供が死んでしまう確率も高い。もちろん母体が死んで子供が生き残る、私みたいなこともあり得る。早く墮ろす決断をしなければいけないのはわかっていた。お腹が膨らんでいるその間客は取れない。だからと言って答えを引き延ばしにす



れば中絶する期間は過ぎてしまい、間違いなくこの店に子供を“売る”ことになるだろう。

\*

「お前さん、随分とお腹が大きくなっているけど子供はどうするんだ？」

毎晩のように店の遊女や店主に聞かれる。

「産もうと、思うの」

「だったら条件があるよ。お前の子をここで働かすんだよ」

\*

妊娠が発覚し、もう何ヶ月もたった。いよいよお腹の痛みも耐えられなくな

り、いよいよおさんが始まる。時刻は明け方の4時だ。今日は客も少なくて全員寝息を立てながらスヤスヤ眠っている。

いよいよ私は、店を出ることを決意した。ひっそりとお店を抜け出す。お腹が痛くて声を出してしまいそうになるのを必死に抑えて、そのまま歩き続け、遊郭の入り口、大門まで行く。大門には警部をしている人たちがいて抜け出すにも抜け出せない。悩んでいる時間はなかった。お腹の痛みに耐えられなくな

り、すでにお腹からは水が出てしまっていた。どうすることもできずに、一旦仕方なく引き返す。ゆっくりと店の方へ戻る。できるだけお齒黒どぶに沿って店の方へ帰る。普段は大通りしか通らない。裏道のお齒黒どぶ沿いの道を歩くのは初めてで、本当にここは吉原なのか不安に思えてくる。3、4分経つと店に戻ってくる。店の裏側にたどり着くと、そこには遊郭を抜けられそうな道ができていた。道といってもお齒黒どぶが他の場所に比べてややどぶ川に崩れていてジャンプをすれば向こう側へ行けそうだった。お腹は痛くて死にそうだったがどうすることもできずに、だけでもお店で赤ちゃんを産むことに対して勇気を持ってなかった私は、大きなお腹を押しさえつつ必死に向こうへ渡り、急いで遊郭を出る。

走るとお腹から水が余計に出てきてしまうのを必死に押しさえて、ずっとずっと、遊郭よりもできるだけ遠くへ走る。逃げるなんて初めてのことをした。幸い私のお店は小見世だから遊女が一人逃げてもすぐには気づかれないしさほど大きな問題にはならない。初めて自分が桜屋なことに感謝をする。もしも私が大見世の花魁だったら、そもそも店の中の見張りは厳しいだろうし、逃げることは100%無理だろう。さらには妊娠をしたら確実に墮ろす選択肢以外ない

だろう。走りながらの私は恐ろしく冷静だった。冷静にならないと、そして何違うことを考えないと痛みを負けてしまいそうになるからであろうか。それでも痛みが勝ち倒れそうになってしまう。痛みになんて負けずに必死に走る、走る、ひたすら走る。走るといっても水が出てきているお腹を抱えながらだと、どうしても遠くへは行けない。それでも限界まで走り、人目のつかないところへ行く。どこかの建物の裏へ入り汗だくになった体はもう限界を迎えていた。耐えられないほどの痛みが襲ってくる。何度も気を失いそうになっているがこれほど痛いということはもうそろそろ産まれるということだろう。吸って、吐いて、吸って、吐いて、吸って吐いて、

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い

吸って吐いて吸って吐いて吸って吐いて吸って吐いて

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い

吸って吐いて吸って吐いて吸って吐いて吸って吐いて

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い

\*

気がつくのと私の痛みはふと治った。治ったと同時に子供の甲高い鳴き声がする。

ようやく生まれた私の赤ちゃんだ。すぐに下半身を確認する。女の子だった。

自然と涙が出てくる。子供が無事に生まれた喜び、そして女の子であるという悲しみ。私は遊女だから、あなたが私の元で生まれてくる時点で運命は決まっている。抗えない運命。男の子だったら違っていたのに。

「ごめんね、あなたを男の子で産んであげられなくて。誰の子かもわからなくて、あなたを育てられなくてごめんなさい。大好きよ、愛しているわ。私の可愛い赤ちゃんよ」

\*\*

私の手は震えている。抱かれ続け、男のブツを握ることで価値が生まれていたこの手は、今はもう赤ん坊の首を握る手に変わってしまった。

胸元から母の形見を出す。母の形見は日が昇って来た太陽に照らされてキラキラ輝いていた。ゆっくり深呼吸をして自分の首の大動脈を切る。真っ赤な血は、勢いよくあたりを埋め尽くす。それはまるで桜吹雪のようだった。

皮肉にも、私の人生この時この瞬間が一番花を咲かせているようだ。

真っ赤な桜に包まれた赤ちゃんは

安らかな顔で眠っている。

彼女が咲かせるべき花は

もうすでに首に咲かせてあった。